

平成 26 年 1 月 8 日

題名 氏名

吉井 宏平



題名

松本峻介の心象 - 1941年以降都市風景画作品を中心に -

要旨

Grid of 28 rows and 30 columns of empty boxes for writing the abstract.

別紙をご参照下さい。

学位論文の題目 外国語の場合は、日本語訳を付す事。
 学位論文の要旨 2,000文字程度
 用紙 日本工業規格A4版
 (枚数は複数可)

論文趣旨

本論は「松本竣介の心象—1941年以降都市風景画作品を中心に—」と題し、15年戦争と言う表現の自由が抑圧された特殊な環境下で松本竣介がどのような心象で制作を行い、また、その心象をどのように作品に昇華したのかを考察する論文である。松本竣介を巡る研究は今日までに数多く残っており、没後当初は松本竣介を「抵抗の画家」として論証する研究が多かった。その背景には竣介が1941年4月号の『みずゑ』に「生きてゐる画家」を寄稿し、軍部の強圧的な文化統制に対して反論を行った事が大きな要因となっている。また、竣介を「抵抗の画家」として捉えるに際し《画家の像》、《立てる像》という作品を中心に論考が進められている傾向にある。近年、村上博哉や浅野徹により竣介を「抵抗の画家」とする研究に対しての異論も唱えられており、今日、松本竣介の評価は変容しつつある。

本論は、3章構造とし、第1章では竣介の生誕から没年までを、少年期や画家としての出発など5節に分け、13歳で流行性脳脊髄膜炎により聴覚を失った点や太平洋画会研究所での出会い、松本禎子との結婚から『雑記帳』の編集、「生きてゐる画家」の執筆など竣介の生涯について検証を行っている。また、二科会に出品した初期の作品やモンタージュ技法を用いた作品、画風転換期の作品や戦後の作品など竣介の作風の変化についてもその時々で使用された表現や技法を中心に考察を進めている。第2章においては竣介の都市風景画についての言及を行っており、竣介が1940年12月に制作した《顔（自画像）》を期に大きく作風を転換させ、翌年1941年以降、多くの都市風景画を制作していることに着目し論考を進める。論者は竣介の真の作品理解の為にはこれらの都市風景画の考察が必要であると考えており、竣介の思想、信仰、描かれた背景にある世相、そして、竣介が使用した表現技法について考察を進めている。特に、1942年1月に制作された《議事堂のある風景》は竣介の作品中から、議事堂という具体的な場所が特定できる唯一の作品であり、その画肌や色彩は都市風景画とは異なる部分が多々ある。論者は2013年8月に《議事堂のある風景》が所蔵されている岩手県立美術館で作品調査を行い、作品中に用いられている画肌に関し多くの検証を行った。また、本作は他の作品と比較し画面の亀裂など痛みが激しいことから竣介が他の作品とは異なる技法を用いている可能性も指摘しており、このような点から《議事堂のある風景》には太平洋戦争に向かう時局の悪化が竣介の心象に大きな影響を及ぼし、本作の画肌や色彩に大きな影響を与えたのではないかと検証している。また、本論では竣介の連作についても考察しており《Y市の橋》や《ニコライ堂》、《鉄橋付近》の画面構成についてエスキースやカルトンなど竣介の制作過程を元にしながら検証を行っている。最終章では論者の制作する作品に関して論者の制作に対するコンセプトや表現、技法について述べ、都市風景画の持つ特性や都市を描く意味について松本竣介の作品との共通点等を上げながら論考を進めている。また、論者のこれからの展望についても触れており、松本竣介の理解など、論文執筆により得た経験をいかに今後の作品に展開していくかを述べている。

吉井宏平



学位論文等の審査及び最終試験・学力の結果確認報告書 【D-13】

審査委員

主査：宇田川宣人（九州産業大学芸術学部美術学科教授・指導教授）

副査：松永洋子（九州産業大学芸術学部美術学科教授）

渡邊雄二（九州産業大学芸術学部美術学科教授）

植野健造（福岡大学人文学部教授）

氏名：吉井宏平

学位論文・作品題目：

論文題目：松本竣介の心象—1941年以降都市風景画作品を中心に—

作品題目：1. 「忘却の街」 2. 「Lost Place」

3. 「忘却の街Ⅱ」 4. 「Empty PlaceⅠ」

5. 「Empty PlaceⅡ」 6. 「Empty PlaceⅢ」

7. 「Lost PlaceⅠ」 8. 「Lost PlaceⅡ」

9. 「Lost PlaceⅢ」

学位論文等の審査結果の要旨：

吉井氏の論文は都市風景画家としての自らの基点を定め、松本竣介の生涯、また、絵画作品や文章などの業績について、時代背景と絵画思想、また、表現内容と技法などを造形的視点から考察し、松本竣介の作品に込めた真意をさぐり、その芸術性を追究した論考である。

第1章の「松本竣介の生涯」は、第1節「少年期」第2節「画家としての出発」第3節「初期作品からモンタージュ技法まで」第4節「画風転換期」第5節「戦後」からなる構成であるが、注釈で掲載してあるように「没後50年松本竣介」図録や小沢節子氏、宇佐見承氏などの著作を参考文献として、松本の出生から絶筆に至るまでの生涯を絵画作品の主題や作風の転換期を中心として概説している。各章では、松本の思想と心情と活動などを丁寧に調査分析し、作品制作時の松本の心象と表現意図や内容、造形性について考察している。

特に第2節の「画家としての出発」の第2項「二科展への出品」において作品「有楽町駅付近」を取り上げ、松本の絵の具を薄く溶いて描く、古典のグレイズ技法的描き方を指摘し、晩年の作品まで続くそれらの造形的特徴を論述しているところは新鮮である。また、モンタージュを用いた都市風景画の考察ではルオーやモジリアーニの影響について先行研究を補充するなど、論者の独自の見方や捉え方で論究していて興味深い。

第2章の「都市風景画作品に見る松本竣介の心象—1941以降の作品を中心に—」には、松本の思想、信仰と心情、時代の世相、また作品中に見る暗調の色彩や絵の具の重ね塗り、削りなどの効果によるマチエールの検証を行うなど造形表現の観点から論者独自の考察による推論を行っている。論者は第3節の『「議事堂のある風景」を見る』において1942年1月に制作した太平洋戦争勃発時に我が国の権威の象徴と考えられる議事堂をモチーフに

制作したこの作品に注目し、岩手県立美術館において目視による調査を行い、技法や造形表現について松本の心象が絵画面に如何に反映されたかを推察しながら論述している。特に松本俊介の人と芸術の特質を論ずるにあたり、一見、理解しにくいと考えられる作品である「議事堂のある風景」を対象として取り上げ、その成立過程や絵画技法を丁寧に追究することにより、松本の心象を浮き彫りにすることができたのは、論者の作家ならではの造形的視点からの考察によるものと高く評価する。

また、第4節の「都市風景画作品の画面構成に見る竣介の心象」において連作の「Y市の橋」「ニコライ堂」「鉄橋付近」などについて松本の心象が画面構成や色彩に与えた影響など造形的観点から考察している。これらの論者の竣介の作品に対する造形表現面の分析は、画面構成だけに留まらず、線や面、形や質感などの表現方法、また彩色やグレージング、亀裂表現などの技法面にまで岩手県立美術館での目視調査を下に推論を確認していて、その姿勢は高く評価できる新鮮な論述となった。その研究成果として松本の作品は多数のエスキースと作品分析から自然をそのまま写し取る写実表現ではなく、エスキースを基本として、対象の視覚的印象を保ちながら、対象の個々の形や数量、大きさなどを組み立て直す過程で自分の思想を作品の構成に反映し、また自分の心情を画面のマチエールやグレイズ技法により、青色系や灰色系、また赤茶系の画面へ導いていく松本の造形のプロセスを初めて明瞭にすることができた。更に、松本の画家像については、機関誌「線」や「生命の芸術」「雑記帳」「生きてある画家」などに残した松本の文章を紐解き、松本の生きた時代背景と社会との関わりについて、また特に松本の都市風景画の中に作者の心象を見るという方法で松本の人間性と作品表現について分析し、これまで松本竣介研究における松本を巡る先行研究の「抵抗の画家」とした主流となる画家像に対して、松本竣介は「ヒューマニズムの視点から冷静な批判をした画家」とした新たな松本像を提議したことは画期的論考として高く評価する。

吉井氏の作品は「Lost Place I」130号、「忘却の街Ⅱ」100号、「忘却の街Ⅰ」100号、「Empty Place I」15号、「Empty PlaceⅡ」15号、「Empty PlaceⅢ」15号、「Lost PlaceⅡ」40×70cm、「Lost PlaceⅢ」20×35cmである。

これ等の作品に対する吉井氏のコンセプトや造形的表現、表現技法については第3章研究作品において言及されている。そのコンセプトの中核は一貫して「現代社会の失ったモノ」であり、それは我が国の政治、経済の影響の下に社会が変化し、かつて盛況であった街を衰退させ風景の大きな変化をもたらした。その負の象徴として残されているシャッター街や路地裏などを絵画表現し、現代に生きる人々の「生きづらさ」や「閉塞感」など現代社会の「ひずみ」や「ゆがみ」、「矛盾」などを問題提議している。「忘却の街Ⅰ」は昼のシャッター街と高層ビル群都市の対比を魚眼レンズで見たように歪ませて表現。「Lost Place I」では同様の風景を夜の状況にした。「忘却の街Ⅱ」は人影がなくなってしまったシャッター街に残る明るい家族の記憶をシャッターに亡霊のように写し出し表現している。以上の3点は大作でありまた論者の写実力、造形力が十分に発揮された秀作である。「Empty

Place I」「II」「III」は夜の都会の路地裏の連作で小品であるがインスタレーション的思考によりサイズやモチーフなどを適格に選考し現代にとり残された都会のわびしい空間を如実に表現している。「Lost Place II」、「III」は対象の風景に合わせて、自分でサイズを決めた木枠を作り制作したことが特徴である。このような木枠に独自性をもたせた制作は「忘却の街II」の如く、ゆがみをもつ木枠を使うなど随時工夫しているのが興味深い。また、インパクトを更に強くさせる表現としても成功している。

論者は木枠のサイズやゆがみを入れるだけでなく、絵画の素材、表現材料を常に表現意図に合わせて工夫している。この論文中にその制作過程、表現材料、スピリットワニスなどの処方せんなどを図や写真で示し、表現技法の研究の一端を紹介していることも高く評価できる。更に、論者の制作活動やテーマが、都市風景を題材に表現展開されているものであり、論者と竣介とは生きている時代や世相などは異なるが、過去、現在、あるいは都会における人の不在という時や場の交錯を示した、その時代とその時を象徴する都市の様相を見つめる鋭い視線を持ち表現する点において相通じるところがあり、制作と論文研究が一貫している。個展、グループ展、上野の森美術館大賞展入選、はるひ絵画トリエンナーレ優秀賞など社会的に作品の評価も高い。造形性、創造性も豊かで博士の作品として相当とする。

以上のことから、十分に博士学位論文に値する。

最終試験、学力確認の結果報告：

最終試験である公聴会における吉井氏の発表は「松本竣介の心象-1941年以降とし風景画作品を中心に-」の論文の要旨と研究の特徴について適切に述べた。特に「議事堂のある風景」「Y市の橋」「鉄橋付近」などについて松本の心象が画面構成や分析、また表現技法に与えた影響などを造形的視点から考察した発表であった。また松本の画家像について、松本が残した文章や作品から新しく「ヒューマニズムの画家」と提案した点についても十分理解することができる発表であった。その会において発表や展示された作品に対して質疑応答がなされたが、審査委員及び出席者からは、吉井氏の作品のレベルが高いことから、論文や発表の造形的論究に安心感が持てるなど高い評価を得、また多くの質問に対して詳細明確に回答がなされ、博士としての十分な蓄積が確認された。

以上のことから、博士学位論文等を博士（芸術）の学位授与に相当するものとして最終試験合格とする。

以上